

[論説] 794年(延暦十三)の幻の「南海地震」について—「震死」の意味

石橋 克彦*

On the Fake “Nankai Earthquake” in 794: Meaning of “Shin-shi”

Katsuhiko ISHIBASHI

2-28-26 Yokowo, Suma-ku, Kobe, 654-0131 Japan

There was a proposal by a Japanese historian that a description of the 794 disaster around the ancient capital, which is contained in an old historical book *Nihon Kiryaku*, might suggest the existence of a so-far-unknown great Nankai earthquake between the well-known 684 and 887 Nankai events. If it is true, the recurrence interval of great Nankai earthquakes in the ancient times becomes about 100 years, roughly the same as that after the 14th century. Critical reading of the description, however, strongly suggests that the 794 event is not an earthquake but a thunderstorm. The important points are that the Chinese character “shin” which the historian interpreted as earthquake shaking should be considered as thunder attacks, and that two Chinese characters “shin-shi” which the historian interpreted as a death due to an earthquake mean a death by thunderbolt. I showed typical examples of usage of “shin-shi” in various historical documents.

Keywords: Nankai Earthquake, 794 Event, Fake Earthquake, Thunderbolt, Chinese Characters.

§1. はじめに

歴史上の南海トラフ巨大地震は、14世紀以降ほぼ100～150年ごとに発生している。ところが最古の684年(天武天皇十三)地震と次の887年(仁和三)地震は203年も隔たっているから、この間に未知の南海地震があるのではないかという考えがありうる。これに関して、日本古代史を専門とする今津勝紀氏が、既存の地震史料集に収録されていない記録に着目して、794年(延暦十三)に南海地震が起きた可能性があるという問題提起をおこなった[今津(2012a)]。

この報告は、今津氏の所属先の岡山大学のプレスリリースでも発表されたために[岡山大学(2012)]、新聞各紙で報じられ[例えば『毎日新聞』大阪本社版2012年4月18日付朝刊]、注目を集めた。日本史学の磯田道史氏は、「これで200年などという間隔をあけることなく、南海トラフは必ず動いていることがはっきりしてきた」と述べた[磯田(2013)]。

しかし、この問題提起は史料の字句の解釈に疑問があり、実際は雷だった可能性が高い。このことを論ずるとともに、鍵となる「震死」の意味を考察したい。なお以下で、引用史料中の〈〉は石橋の注である。

§2. 歴史学者による794年の「地震」

今津(2012a)は、『日本紀略』の延暦十三年七月十日(ユリウス暦794年8月9日)条の記事に注目した。それは、

震于宮中并京畿官舎及人家。或有震死者。

というもので、読み下すと「宮中ならびに京畿〈宮城周辺地域、みやこ〉の官舎および人家に震す。或いは震死の者あり」である。今津はこれを、地震カタログに立項されていない未知の地震だとした(彼は宇佐美(1996)の『新編日本被害地震総覧[増補改訂版]』を引用したが、最新の宇佐美・他(2013)でも同様)。

ここで『日本紀略』とは、神代から後一条天皇に至る(1036年までの)編年体の歴史書である。成立年代と編者は不詳だが、正史である六国史(6つの編年体の勅撰史書)からの抄出に続けて、六国史のない時代(887年9月中旬以降)については、現在は失われた記録にも基づいていると考えられ、六国史の校勘に役立つほか、六国史以後の基本史料である。当該記事は、六国史のなかの『日本後紀』の時代のものだが、同書は全40巻中30巻が失われていて、本記事の元の記述を知ることはできない。

延暦十三年は平安遷都の年であり、七月一日に長岡京の東西の市が新京(平安京)に遷され、十月二十二日に桓武天皇が新京に遷った。

今津(2012a)は、『日本紀略』の延暦十五年二月廿五日の

勅す。南海道の駅路迢遠にして〈はるかに遠く〉、使令通じ難し。因りて旧路を廃し、新道を通せ。(原漢文の読み下し)

という記事を、地震・津波被害を受けた四国の一州道路の付け替えかもしれないと考えて、この地震が南海巨大地震だった可能性があるとした。

* 〒654-0131 神戸市須磨区横尾 2-28-26
電子メール: ishi@kobe-u.ac.jp

いっぽう、日本古代史専攻の森田悌氏は、『日本後紀』の全現代語訳[森田(2006)]のなかで、『日本紀略』から補った当該部分を以下のように訳している。

宮中と京・畿内の官舎および人家が地震により揺動した。この地震により死亡した者がいた。

および、

天皇が次のように勅した。

南海道の駅路は遠廻りとなっていて、命令の伝達が困難となっている。そこで、これまでの駅路を廃止して、新道を通すことにせよ。

また、日本中世史を専門とする保立道久氏は、延暦十三年七月十日の事象について、「長岡京を地震が直撃して死者がでてい」として「長岡京地震」と呼び、詳細は不明としながらも、当時の政局にとって重要な意味があったらうとしている[保立(2012)]。

§3. 「震」と「震死」の意味

以上のように、複数の歴史学者が、『日本紀略』延暦十三年七月十日条の「震」を「地震の振動」、「震死」を「地震による死」と解釈している。しかし「地震う」とは書かれておらず、慎重な検討が必要である。

そもそも、諸橋轍次の『大漢和辞典』(大修館書店)によれば、「震」の意味は「①はげしいかみなり。②かみなり。③ふるはす。ふるへる。(④はためく。いかづちが撃つ。雷撃。⑤うごく。うごかす。<⑥以下は省略;石橋>) ④いきほい。⑤ぢしん。<⑥以下は省略;石橋>」である。また、白川静『字通』(平凡社, Japan Knowledge Personalで閲覧)の「震」の訓義は、「[1]かみなり、かみなりがとどろく、電光がはためく。[2]ふるう、ふるえる、はげしくふるう。[3]おどろく、おののく。[4]勢いがはげしい、いかる、おごる。[5]地がふるう。<[[6]と[7]]は省略;石橋>」である。

「震死」については、『大漢和辞典』が「落雷に撃たれて死ぬ。又、大震動の衝撃により死ぬこと。」としている。『字通』は「震死」を掲げていないが、『日本国語大辞典』(小学館)、『広辞苑』(岩波書店)、『大辞林』(三省堂)などが、「雷にうたれて死ぬこと」として「しんし[震死]」を掲げている。

ただし、「震死」の実際の用例には、①落雷に撃たれて死ぬ、②大震動の衝撃によって死ぬ、③地震で死ぬ、の3種類がある。以下にそれぞれの例を示す。

3.1 ①落雷に撃たれて死ぬ

この用例は歴史書のなかに数多く見いだされる。いくつかを、それぞれの出典から直接抜き出して示す(いずれも原漢文の読み下し)。なお、最初なのは「震=落雷」の例であるが、この表現は「○○寺の塔に震す」といった形で非常に多い。

1. 大宝二年八月八日(702年9月4日)、倭建命の墓に震す。使を遣わして祭らしむ。(続日本紀)
2. 天平二年六月廿九日(730年7月18日)、雷雨。神

祇官の屋に災あり。往々人畜震死す。(続日本紀)

3. 天安二年六月七日(858年7月20日)、和泉国言、霹靂官舎六十余宇と民屋卅宇を破る。震死せらるる者二人、支体を傷つく者三人。木を折り苗を残す<きずつけた>。(日本紀略)
4. 元慶二年九月廿六日(878年10月25日)、夜雷電大雨、諸衛殿前に警陣す。<廿八日の条で>紀伊国司言、今月廿六日亥時、風雨晦暝、雷電激発、国府の廳事及び学校并に舎屋に震し、官舎廿一宇、縁辺の百姓四十三家を破らる。<中略>掾利永の男女各一人、国掌漢人貞魚、合せて三人震死支解し、大木倒仆する者千余株。(日本三代実録)
5. 仁和三年六月廿九日(887年7月23日)、是日、右近衛将監正六位上在原朝臣遠瞻、致仕の中納言在原朝臣行平の鴨河辺の第に在りて震死す。遠瞻はこれ行平の子なり。(日本三代実録)<武田祐吉・佐藤謙三訳『読み下し日本三代実録』は「震死」を「うたれてしにき」と訓じている>
6. 応和元年五月廿二日(961年7月7日)、暴風雷鳴、西京に震死の童一人あり。(扶桑略記)
7. 久安二年三月八日(1146年4月20日)、雷前齋院家に落ち。忽ち焼亡。故下野守明国の子震死す。(百鍊抄)
8. 安元二年三月一日(1176年4月11日)、雷法勝寺九重塔に落つ。第九層。下部二人震死す。御塔は無事。(百鍊抄;小字は割注)

3.2 ②大震動の衝撃によって死ぬ

これについては、『大漢和辞典』が用例として、「[日本外史、徳川氏正記、徳川氏五]發_二大煩_一中_二閣第二層_一、二女震死。」を挙げている。この話の元は、『台徳院殿御実紀』慶長十九年十二月十八日条(1615年1月17日;「大坂冬の陣」の最中)の「大佛郎機<オオフランキ、または、オオツロウキ;大砲の一種>を放けるが、雷霆のごとくひびきて、折ふし淀殿の居られたる天主の二重目の柱にあたり、柱折てその下に侍りし女房二人、粉のごとく打くだかる。<中略>(駿府記、武徳大成記)(此説十六日注文にしるしたる、稻富宮内が鐵炮にて淀殿居間の柱を折倒し、女房若干震死すといふ説と大同小異なり。<後略>)」であろう。

なお、「雷にうたれて死ぬこと。また、感電して死ぬこと」という語釈で「震死」を掲げる『日本国語大辞典』が、上記の『日本外史』の一文を例文として示しているが、不適切である。

「震死」のこの用例は多くはない。

3.3 ③地震で死ぬ

これについては、古代から慶長十二年正月(1607年2月)までの全地震史料を収める「[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版)」「[古代中世地震史料研究会(2009)、最終更新日2014年9月18日]を「震

死」で全文検索した。その結果ヒットしたのは、わずか3件であった。

第1は、いま問題にしている『日本紀略』延暦十三年七月十日の「震死」である。第2は、正応六年四月十三日(1293年5月20日)の鎌倉方面の大地震についての『興福寺年代記』の記事で、「鎌倉大地震死人一万余人」というものだが、これは明らかに「大地震、死人」であって「震死」には該当しない。第3は、文禄五年閏七月十三日(1596年9月5日)の大地震についての『永禄以来大事記』の記事で「京師及伏見大地震、人多震死、<下略>」というものである。

つまり、この意味の明瞭な用例は古代・中世においては結局1件だけだった。しかも上記の唯一の例の「震死」も、原義は②の「大震動の衝撃によって死ぬ」であって、それが地震の場面で使われるから結果的に「地震で死んだ」ことになるのだと考えられる。

§4. 延暦十三年七月十日事象の解釈

前節を踏まえて延暦十三年七月十日の記事をあらためて見ると、これを地震と解釈するのは不自然であり、3.1に列挙した例と同様に雷と解釈するのが妥当であろう。

原記事は、前述のように『日本後紀』の逸失部分に存在したと思われるが、菅原道真が六国史の記事を事項別に編集した『類聚国史』の「災異部五・地震」には採録されておらず、当時から雷と認識されていたのではなかろうか。なお、『類聚国史』は当初二百巻だったと考えられているが現存するのは六十二巻だけであり、「災異部」も四の「旱」、五の「地震」、七の「火・蝗・凶年・三合歳・疾疫」しか伝わっておらず、雷の記録を知ることはできない。

問題の記事では、「震」の対象が一つの建物や場所ではなくて広域であるようなので、雷ではないのではないかという疑いが生ずるかもしれない。しかし、3.1の3、4の例のように広域の場合があるし、現代でも広域で落雷することは珍しくない。

かりに地震だったとしても、南海巨大地震であれば『日本後紀』に五畿七道云々といった詳しい記事が書かれて、『類聚国史』がそれを(『日本紀略』もある程度)転載したと推測される。そういう記述がないことから、南海トラフ巨大地震だった可能性は低いとしてよいだろう。『日本紀略』延暦十五年二月廿五日条の南海道駅路付替えの勅命は、問題の事象から1年半以上経っていて、地震・津波被害によるものとは考えにくく、原文どおり「遠回りで命令の伝達が困難」だったからであろう。

なお今津(2012b)は、本事象については注のみで触れ、『類聚国史』は雷と判断したようだが広範囲の震動だから地震の可能性もあると記している。

磯田(2013)で「延暦十三年南海地震」説を認めた磯田道史氏は、磯田(2014)では、「しかしこの説につ

いては、その後史料中にある『震』『震死』が地震でなく、落雷・落雷死を意味するとの有力な反論が出て、疑問視されてもいるから、今のところ、よくわからない」(p.78)と述べている。本稿の要点を第30回歴史地震研究会で発表し[石橋(2013)], 石橋(2014)のコラムに略述したので、「反論」とはそれらを指すのだろう。

結論として、延暦十三年七月十日の事象は地震ではなく、雷だったと考えられる。684年と887年の間の南海トラフ巨大地震の存否は更なる検討課題である。

謝辞

コメントを頂いた高橋昌明氏、査読者・保立道久氏、編集担当・西山昭仁氏に感謝いたします。

対象事象：794年長岡京落雷

文献

- 保立道久, 2012, 歴史のなかの大地動乱—奈良・平安の地震と天皇, 岩波新書, 264 pp.
- 今津勝紀, 2012a, 仁和三年の南海地震と平安京社会, 第28回条里制・古代都市研究会大会(2012.3.3, 奈良文化財研究所), https://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/soumu-pdf/press24/press-120417-7-2.pdf
- 今津勝紀, 2012b, 仁和3年の南海地震と平安京社会, 条里制・古代都市研究, 28号, 30-41.
- 石橋克彦, 2013, 684年と887年の間に未知の南海トラフ巨大地震があるか?, 第30回歴史地震研究会(秋田大会)講演要旨集, 24.
- 石橋克彦, 2014, 南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会, 岩波書店, 262pp.
- 磯田道史, 2013, 磯田道史の備える歴史学: 災いの記録ひもとく, 朝日新聞, 2013年4月6日朝刊, e7.
- 磯田道史, 2014, 天災から日本史を読みなおす, 中公新書, 238 pp.
- 古代中世地震史料研究会, 2009, [古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版), 最終更新日2014年9月18日, <http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/db/>
- 森田悌, 2006, 日本後紀(上) 全現代語訳, 講談社学術文庫, 420 pp.
- 岡山大学, 2012, PRESS RELEASE: 794年に発生した未知の巨大地震を確認, 平成24年4月17日, http://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/soumu-pdf/press24/press-120417-7-1.pdf
- 宇佐美龍夫, 1996, 新編日本被害地震総覧[増補改訂版416-1995], 東京大学出版会, 518 pp.
- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 722 pp.